

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02648

研究課題名(和文)大阪方言におけるピッチアクセント型の変化 - 語と句の音韻・統語分析

研究課題名(英文)Change in pitch-accent patterns of Osaka Japanese: Analysis of words and phrases

研究代表者

吉田 優子 (Yoshida, Yuko)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：70288603

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：大阪方言の特徴を世代間の変化を観察することによって映し出し、日本語話者には大阪方言を特徴づける音韻的要因を探求した。グリコ、ビスコなどの商品の命名当時は中高(すなわち真ん中の音が高い)ピッチで発音されていたが、徐々に語頭の音だけが高く発音されるようになって来た。しかし全ての中高語が頭高に変わってしまっているのではなく、新しく作られている語ではやはり若年層でもユニバ、ファミマ、のように中高語として誕生している。コンビのように共通語ではめったに高いピッチで発音されない「ン」の音も高く発音される。このような特徴とピッチ型の関連性を統率音韻論によって解明、認可主層を提唱し、理論の発展にも貢献した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大阪方言の特徴の世代差は方言話者を中心として、また、共通語の次に公共放送で使われる大阪方言はあまりないことから国民の関心事でもある。特に中高と呼ばれるアクセント型は特徴的で、若年層でもユニバ、ファミマのように中高語として誕生している。コンビのように共通語ではめったに高いピッチで発音されない「ン」の音も高く発音されることなど、観察を行った。「ん」と「ぬ」の発音の東京、大阪間の違いをもとにピッチ型の違いと合わせて考察し、音韻理論の発展に繋がったことがこのプロジェクトの学術的意義と言える。

研究成果の概要(英文)：This project focused on recent developments in Osaka Japanese and contrasting pitch-patterns of Osaka and Tokyo Japanese. Trimoraic words of Osaka allow for a medial accent pattern, which is unusual in Tokyo. The changing pitch pattern of old coined words e.g. guriko may suggest a more recent change of the system, however, newly coined words are medially accented. Accents on special moras, such as /N/, motivate the theoretical claim that there is a novel tier for licensors (LT) accounting for a unique accentual pattern in Osaka. This representation accounts for apparently unconnected dialectal traits in Tokyo and Osaka: the difference in the phonetic interpretation of /N/ and the contrasting accentual status of /nu/. Both /N/ and /nu/ are represented as a nasal element followed by the |U| element; the formal difference comes from a point of parametric variation: |U| can either be headed (Osaka [u]) or not headed (Tokyo unrounded), this determines whether the element is projected to LT.

研究分野：理論言語学・音韻論

キーワード：大阪方言 ピッチ・アクセント 発音の変化 撥音 統率音韻論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

共通語の3モーラ語に於いては中高語がもともと希少でしかも頻繁に使われる「たまご」を含め、アクセント型は変わって来ていた。大阪方言に於いても杉藤 (1995) に集約された世代にわたる変化からもずれているように思われた。そこで杉藤で採集されたデータが1930年頃と1960年頃出生した大阪方言話者であったので、1990年代出生の方言データを採取する事を計画した。大阪方言では他の関西方言と同様、撥音「ん」や長音の台に母音にもアクセントが見つかることを総合して考察を進める計画をした。

2. 研究の目的

- (1) 1モーラ語、2モーラ語、3モーラ語のアクセントデータを収集し、中高語のみならず全てのピッチ型での世代間の変化を調べようとした。特殊拍(撥音、長母音、促音)を含むデータにおいても録音をし、観察を計画、データの記録は大きな目的の一つであった。
- (2) 関西方言では共通語などとは句におけるアクセントやピッチ高低の付与が異なっているように見受けられることから、異なる形態・統語構造が考えられる (Yoshida & Zamma 1999) ので、様々なデータを元に再考察を行う。
- (3) 同時に、この世代間の変化やピッチ型の傾向からその背景にある音韻論的要因を考察することを目的とし、音節構造、文節音レベル、またそれを細分した音韻要素の検討した上、音節構造を統括する音韻表示上の新しい提案を目指した。

3. 研究の方法

- (1) 1モーラ語、2モーラ語、3モーラ語のアクセントデータを収集し、語彙アクセント型ごとに整理。京阪神共通の型、3モーラ語をとって説明すると、頭高、中高、アクセント無し2タイプのピッチ型での世代間の変化を調べようとした。特殊拍(撥音、長母音、促音)を含むデータにおいても録音をし、観察、データの記録。

データ収集： 1990年代生まれ、三代遡って大阪市内在住の被験者を募る。

同志社大学京田辺キャンパス、メディア工房にてデータ録音。

被験者 1. 大阪市東住吉区在住女性 (1994年7月11日生まれ)

2. 大阪市住吉区在住女性 (1995年2月8日生まれ)

3. 大阪市西区在住男性 (1998年3月28日生まれ)

4. 大阪市西区在住男性 (1994年12月1日大阪出生、両親は移住)*

*三代遡るという条件からあえて外し、差異を観察する

データ録音とともにピッチ型を記録、適宜質問

データの考察： a. 記録したピッチ型をそれぞれの型に分けて分布を検察。
b. 90年代生まれの特徴をまとめる。
c. 90年代生まれのピッチ型を杉藤 (1995) と比較検討

- (2)(1) で得られた無アクセント語のデータを中心に句のパターンへの応用を考察、句同士が分析的に結びついているのか、非分析的に結びついているのか、形態論的、統語論的考察を進めた。
- (3) 撥音はじめ、特殊拍とアクセントの関係を理論の立場から考察。音節構造を統括するのは Licensor Projection かどうか検証する。

(参考文献)

杉藤美代子 (1995) 大阪・東京アクセント音声辞典。丸善

Yuko Z. Yoshida & H. Zamma (2001) "The Accent System of the Kyoto Dialect of Japanese: A Study on Phrasal Patterns and Paradigms". In (Van de Weijer & Nishihara eds.) *Issues in Japanese Phonology and Morphology*. Mouton de Gruyter.

4. 研究成果

1. 日本語では、ピッチ・アクセントの語彙指定、もしくは付与された文節音には高ピッチが知覚され、また、近隣の文節音に波及するとされている。音韻領域には必ず主部があるという考えから、いわゆるアクセントがない「無アクセント語」に高ピッチが知覚されるのは領域の最後尾が主部性を持つこととなり、この主部性の解釈として高ピッチが認識される。この領域が連なる状況、すなわち分として句を並列する際に、この句同士がどのような形態的結びつきをするかによって、その文のピッチ型が決まってくる。これは方言をはじめ、変種によって異なることがわかった。

2. 大阪方言のデータ収集により、3 モーラ語に興味深い変化が観察された。大阪方言らしさを担う中高のピッチ型は話者間で語数としてはほぼ同じなのだが、語彙アイテムが世代間のみならず、同世代間でも異なっていた。この中高パターンにおいて大阪をはじめ関西方言では特殊拍にアクセントがあることが多々ある。撥音などの特殊拍とアクセントの関係を統率音韻論の枠組みで考えて、Licensor Tier を提唱。2018 年の Manchester Phonology Meeting での発表、同年の関西言語学会での招待講演としての発表に繋げた。2019 年 6 月には KLS Selected Papers に『大阪・京都方言における撥音とピッチ・アクセント』として考えを論文にまとめ掲載。日本語共通語の撥音にはピッチ・アクセント核が共起しないのに対し、関西方言では母音と同様にアクセント核が撥音にも起こりうることを撥音の音韻構造から解明した。一般的に共通語話者を始め、東日本の方言の話者には撥音に置かれるアクセント核は非常に違和感があるところであり、共通語と関西方言に違いを理解する上では大きな話題である。同時にこの分析には統率音韻論の拡張が提唱されていて、音韻理論の発展にも寄与している。撥音「ん」/N/と「ぬ」/nu/が音韻構造的には同じだが、そこに連鎖するメロディー部分の要素のステータスから音声具現が異なることを、Licensor 層を提唱し説明した。これを更に音響分析に基づき、分析の裏付けを行った。

3. 大阪方言の韻律（プロソディー）と特殊拍の関連性に焦点を当て、また世界の言語の韻律の特長と照らし合わせて考察を進め、ウィーン大学の Marcus Pöchtrager 博士との意見交換、共同研究を進めることができた。同時に同志社大学で 3 月開催予定であったにおいてゲストとしてデウスト大学の Shanti Ulfsbjorninn 博士を招聘し、促音と韻律に関するワークショップも開催する計画を進めていたが、COVID19 パンデミックのために開催中止となった。しかし、その準備のために共同研究を進めてきたので、今後の研究に生かして行ける事になった。今後、共同研究として日本語、イタリア語の促音とプロソディーの関係について追求してゆく事になっている。2019 年 7 月にロンドンでのワークショップに参加し、これを元に統率音韻論における Licensing に関する出版計画を編者として（共同編集）立ち上げた。こちらも COVID19 パンデミックのため、予定は約 3 カ月遅れてきているが、原稿も集まりつつあり、このまま進めてゆく。Dr Geoff Williams と英語の韻律、ストレスを考えに加えるため、共同研究を進行させている。この結果をまとめてこの論文集の自身の貢献とする予定である。

世代間におけるプロソディーの違いについては大阪方言とよく似ている（しかしそれぞれに独自のシステムをもつ）京都方言の世代間差との対比も同時に考察を始め、京都方言のプロソディーに反映される統語構造の考察を進めている。このように、科研費の期間内に成しえた業績も多かったが、その上にこれからの課題に関しての焦点を定め、その礎が形成できた事が大きな収穫であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉田優子	4. 巻 1
2. 論文標題 大阪・京都方言における撥音とピッチ・アクセント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 185-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田優子	4. 巻 1
2. 論文標題 大阪方言らしさとは？ 3 モーラ和語における中高型	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 現代音韻論の動向 日本音韻論学会20周年記念論文集	6. 最初と最後の頁 104 105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yuko Yoshida
2. 発表標題 Elements on the Licensor Tier for the Prosodic-Domain Head
3. 学会等名 Manchester phonology Meeting（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田優子
2. 発表標題 大阪・京都方言における撥音とピッチ・アクセント
3. 学会等名 関西言語学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中真一 ピンテール=ガーボル 小川晋史 儀利古幹雄 竹安大 (編)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 400ページ
3. 書名 音韻研究の新展開 窪園晴夫教授還暦記念論文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----